增鏡

參

僧4
775
86

曾4
門 773
番 86

宮内省圖書寮

第八

文永元年ハかのとのうの卯月ノ蓮華王院供奉ノ行
幸あり一院ハ後白河ノ御所ノ新院ハ草
壇ノ御所ハ北面ノ武士ハ西ノ方ノ平
所ノ御車ハ北ノ方ノ御車ハ平
のまへあるもの丑ノ刻ノ御所ノ上
御幸ハ上達部ハ殿上人ハ
殿上人十二人ハ侍ノ大夫ハ
所衆ハ
物ノ上ハ

宮内省圖書寮

諸司百官のこれたり〳〵左大臣うすき色そのうなと右大将通雅ゝれ名ゝ乃下がさね按大納言公敦
なり〳〵也右大将安倍すけゝ〳〵ゝりえぎの
上乃ゝ面侍従中納言右兵衛督通基房門
督通頼衣笠宰相中将源宰相中将
下がさね前太政乃はけゝ面なり別当高定宰相中将
通持三位中将実兼侍従親殿上人頭中将具氏忠秀
さの人〳〵松童乃ゝ〳〵ゝ教乃うのゝ面なり
女房乃ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ具氏ゝ教ゝ
のゝ下がさねゝ〳〵ゝ〳〵ゝ
ゝ面ゝ〳〵ゝ近衛将世ゝ人ゝ〳〵ゝ

法〳〵ゝ〳〵ゝ
ゝ〳〵ゝ女院の御車むかひ〳〵ゝ乃小の妻戸
乃左右大臣よせゝ面院司大納言通成事ゝ
ゝゝゝゝ楽屋の礼拝ゝ乃ゝ
ゝ法師ちかゝゝ法導師ゝ
聖基僧正ゝ〳〵ゝ引物ゝ〳〵ゝ法師
ゝゝゝゝ〳〵ゝ〳〵ゝ
楽池久ゝ貴仏ゝ人〳〵ゝ万乗
のうち〳〵一重義人ゝ〳〵ゝ大臣ゝ
後乃禅納言ゝ平納ゝ御門泰山影院法師御
面の風式ゝ〳〵ゝ男ゝ記録ゝ作〳〵ゝ

乃清書紙の三位相伝の色紙額いうち
遠くもめしくれし　長寛の教長卿のうせるがやも
ざりけるいとのふびもそれとそ用れなかりて
まことへくんはとうふ紙つまりてあるべき
よ事うかふかもうもづくりき事いでたうう
とて将軍宗尊親王七月八日俗なるやうとて世のわり為
ていとゝめて世乃ほうもあるむとうの儀式なるぞ
なくめぐらうべきよしとのこゝろに思むけ
ぬるぐにはあやしきゆりうあるもの世のわりあ
ゝ世にてうりわり六ゝ世小方よそれまし
相模殿よ為世をたゝ御ぬさうあつまふ

世乃おこなてはうふぬゝ相模守時宗ゝ右京権大
夫政村の朝臣なり政村ゝはあるゝ義時の四郎なる
京ゝ南六ゝは陸奥守時氏武蔵の国時頼とそ多
ゆる中務乃世乃御のほりたりふかの世乃三下
成給ふ若君近衛殿乃姫君乃御腹そゝ　十月七日
よ将軍ゝ宣旨かゝぬゝ　殿ゝ　宮ゝ
御位の中納言ゝ御つゝむふ京へ下されゝてくゝ
ゝぬ世事ゝなるとぬゝて十月ゝ右兼的つ世ゝ
世あゝ左ゝつ万里小路殿へ世う門御ひあゝてのゝそ位
のゝへ御母准后ゝ御ゝもまりはゝめて御新宮あゝ
ゝるべゝへくゝもまりゝ世ゝまりゝよ世ゝ

世をはなれんとおもふ心ありしかども
とかくしてすぎにしかば建長四年の十一月に
下向せしかども後いまだ十五年があひだ
いとどうもてあつかひ世をいとひ
はるばるまゐりよりひとへに
おもひとりくんでそうたづ
ねられしかばありしくもあり宮仕や
虎とのこもりてなさんとはいもしらめ
いとい嵐のあかうせ世中
まくさはいかんぞうもあるとかなる
うくはらんどよりなりしかば
あるかたのむ小野の宮殿の
法ゆ紀ゆきのうもあるまた

なくきこえんかたもなくはかなくはかなくはかなくれ
ばまたいかなるかくらいかくかくなる野の
面くもれるけくたなびくもとふめてけくれ
ばなるへ人の年二月十五日は泉山殿の浄金剛院
にて十五日温盤会儀式うたをこなはせふう
もとうり八日は市八講に人くもかくれ
とえくもの沢大殿二条殿あるも西八条にて校東山殿の
はたもあるに八講をこなはれ実日殿も光明浄土
まく結縁灌頂をこなはれるこれ鷹司殿まもむ
うはたはかのくらの十三年の法華にて大炎殿も
ひとあり紀とくもいとくるまに殿はかは中に結縁の際

泥金書將軍北條殿佛をなりけるを恵心僧都
はじめとしてもてなりあるべきかりをはひく供養し給
ふ常の佛乃ぞ面をはうとなまひて化佛出れ
光なくめでたくおがみ給へり面をかくしこも
をうつしたる事のこと年ゆるしたちく功濁はゆるぐ
し安和門流も法法華をこうじ給ひとこも法華
もいとあるくあうれくまつりけるまつる佛
法乃ことりをうしてあるべき敵の大將家の内
大臣をなりはるべき節會はたるまゝよ大饗をとな
ふ公卿着はは新大納言為成まつりあり沖縄な
と例のおとぐもわりつくなん今出川の中納言

実兼を琵琶弾しまゝふまを
拍子者りてをやうをはしまつ文永二年閏六月
堂へ出まいりめでたうしまつりふれ
ぐさのこはをそをしつふくて月七日より院の
うへを文殊山房をそ御出法華あるうを女院もかく
渡れたゝ御所乃月六日十種供養の法華二
部浄土の三部法華の渡あるべ秋冬の法あるさ面
をはをもうもあるいこ御けりうく震敵乃れ
はゝ記浄土はしやうこんもかどうをまをそをこ面
むうをく猶婚乃ちんく天は光とかやう金銀
乃ぐり地を聖をはは乃筆をとゝびかゝ上座

ア左右のはき取らは左大臣基平内大臣家經大納言よしのり
良教資季通成師继通雅中納言公教長雅通教經
俊事相ハ附継資平宗雅権言具氏などはあつる
篳篥調の調子を吹く天童二人玉の橋をわけく
傳供ども笙にまてまつり御殿鳥向楽を吹おし
たり中将ハ楽屋ハかざられるもば橋のうへと楽人
はしゆくまつる夜流のうへにいでさせ給ひて傳供
まうくるに源せおらしまに夜おき母にかくしけるく
めぐらし関白殿大おほいど左大臣内大臣られ傳供
をしめらぐらせ給ふ宗明楽秋風楽を奏してまり
をしまおかわくおりし御さく春舞の毛おかりなりき

なり御前の御遊まきて笙ハ公藤通頼房冬宗雅節は
長雅師親相保篳篥ハ實成朝臣光顕琵琶地新院
今出川中納言実兼富小路三位公成箏大納言二位殿
院のうへ公のよし又なにをめしうど校入道相国女中女
とぞ定し又刑部卿中宮の少納言兵衛男りとぞ
良教の大納言なすらそひられをかのそぐれる上手たる
のちとうし行むんハ弥勒菩薩を作らせられ
名々ぬかくらびん御經一部を小野の社へ
御奉納いま一部三部經を八幡へ御幸ありて雉
まいつら施之女院のかのせおらし御てるは構
川まぞくちめられをおうまくおかし御心は佛法なる

いとかみを屏んどく れくはたくはたくはたくはたを聖武
天皇光明皇后の御ちゑ ありがたくうを
とまりりしがむしし 月毎つかうもとをとれく
事伊勢式河も峯と云 ちくちく永文の御まつも
御松なと祭るもあの みて中とはうまいる
みちすがら ちうちうを糸行のちくべかがしてゐり
ゆくあうぐうしし 中下のうち四ちゆうるぬふる紀
例よりせく 准后の宣旨まいる 使よ中院か将
為定の約ちくぶりく事はよりゆとめして 裳
唐衣ゆくくまふ舞踏 てのうみやこれゆうか
やきうべきれるが 河人くまくしゆうも

えんるのうちして あぶきあがしあがるが事
なをもはぬがなれぐかうくしけがきはあ
りさあるもばもぐうふてまでぬそのかしあが
月のうちたのれくぐ 乃日野山方へ流新流
大文院の幸あうせくれきはくとはくきれ銀金
御さくぐし螺鈿の御奏うちあるれぬるどの事
よりあり流の御うの御小也衣袴ゆ歌乃御食白御たう
御馬二疋かくあや奥綾ゆがくして二階はくく袴く
御双子鈴御すがつ付世くとへくれりれくうの石
なり笛絃の御厨子樂器いつくくれあやふ歌ゆど
まて付うくとうなる女院乃きくく新院の御ぬんかど

をなかば屋うなると大納言二位殿のを繁栄まりの
のたこまぐいとなりまめうきうきうかれぐりぞ
あるとけら上達部殿上人ふも馬牛ひろ銀のかさみ
をめくませて松茸入るる山へこれいり歩れ
きくはらひのちゆうけいくたくさこ
しやせば人くもろひこぐれ面くまそすぐぬ
うれかるでよう安嘉門院丹後のあまれ檜三市むし
しふそかりしそそりそ但馬のきのされ
ぬぐゆめふくぐ殿乃家の大納言光成の三位
るぐ出仕うまつるおの女房のあうさ面ぞ又
いくぬみしうれかくれかるれをあるかぬ

屋くらの殿の事法ん乃まくにおのまくれ
むをれ壹部白柏子田樂なぐいふ事おのませ法
てぬかくへの都芳門院ゆを屋面うくぞかりま
をさ殿ふ人くを法ひようちとけぞきぬの多い
ざやうよるくくふいまめうき院のうちかり又安親
歩院くいひく山の峯のる市堂は法ひよたてごも
ら世院むく沖觀法かぐあるは人乃まつる事
もあやをくれ時子とうけくむ世法ひくぞを
のつくを人をもりもを文そのうちあ秋の面日東
ありくいを和せりくふきを乃くを屋足てく
うくを法事くれ物すぐれわぐに一院大文東二面院

おぼしかけしかたちにまかせ法のよのほき
たぐ左相京都升入道教[illegible]もさふらひけるあひだ
のおなじ宗雄久我大納言雅忠などうとくもつぬ人く
ばりして大臣酒まいはあまもくぐりおのれく上下
すこしうちとけ給へるよ大ぜいなかの法の世界と
をもいりぬひくもちるものどばうやすらむく
左相宮位きこあはりぬ中文川院さてれりませハ
そ一宮子降誕もあるこ東門の栄花ねんろふべ
うう次実盛もぎうういはるぬをのこりうう源
めくくも思ひはるぬふひりのうまへんのそこう
おん位ちとりはへと人くるふりあるがはう

なくおんれりひあるをのたちれたぐ実雅ひい中文の
はは年ふくのくまふとをいぞやと年よこまりてか
ぬがさのんう一流おかふ年あるをくまふう
ちぐあうく入左相国ふかもさぐらぬべき
人ちおんはるうくはるうくうはけくうはけ
はりふく親くさぐうみりひかなな
ふもあくふをくのはをぐあくうう證明
が教文ともりぐくはりはひてうう
ちあくもはへどうれいくあるれきくれば入道
あをはのくすく深のはは神ぬくはひるふもを
りりおうう又をれよう大風ふぐくく人くはを

くるをこかつれうすゐ事かすきぬ中ゑ明堂敏
まゐぢぬものうちは未て人形をはりて文
殿と金ゑて入たる寮あるを服をあてはるぬ相
ありをのづゝもあやまりくるつゐ人々目れたぶ
もけるぞれをつしき陸陽寮の守護神の祢ま
うびぬ山乃文殊楠いるりの中ゑるゞも吹そゑ和
むくをゑくきゝかく約束もをめゝをゞきに風
をう和ゑのくゝは人の家をきれゞ吹あゞれを
内なる人をちるを風うゐ和ちくゑうをるゞゝ
をるゞをめづゝゐるあまりゐかくゐびをゝゝ記
風をとゞ沖ゐをこれゐれ多ゐゐもをり記人乃

乃つゝゝかるゝぬなく巻ゝ々りそれ西園寺の
大れくゞ箱をやまゝゝ行ふて山く寺く
波法演記まつりくゝへゐゞかゝまくひゞ記の
しをつをゞろもをうひをくて十月十二日うを記ひ
ぬ入道殿をはゞめれゞゐゝかゞをゝ人ゝかゞをゝれ
中文も出服まて出ぬひぬ山ゐを法大乃大ゐゝく
実基の乃ひゐをゐゐもばゐの結服をはゝに出子
もかゝ中文をゝ乃納をてゆ内ふ女房れう
ゝ中ゝゝれど山れゝ乃れふをゝてれゝこ仁蓮も
ゝゝくゝよあまゝれゝすもゞいゞをゝも小れ方乃
出ふをゝれゝ乃山ゐゝゞ入道殿ゐういすゝゝ

かさけをそれいちやくかどおそくれそれんちそこ
まはさのこなげくくへかりりるるやはるさの
歌出榕〻入給へる出家〻給と人乃ぬすこわらと
けるぞめづらしれる出家乃志もみじふて中まか
ぶる出月乃おそしまれれば和法ちやまつるに
かるなまうべ乃入事かくかぶれ乃じと
ちやあ乃かりあは人とりてぐちてほ
まりくるまくく実き中文乃出身かどふく
おるなるうしばいとくくるくくれるぐ
まぞ世人も思ひ申おるくいい事とおぐい
でりくなをあられるかくく如流乃仲ふくく

もそまとのくくはくまりせりり十二月一日ち皇后
宮又出産ちくく天下ぐはくをいくぬ也のおの
こみこ 波字多院 むまもひぬれくぐ小れくる乃出んの中
思ひ乃ぐくいとぐ歌乃あけめるんちなふ
院をいそ乃出事あるくくもてちやくそまつる形
形ふ内ち仲ちち形まいはきい乃歌と乃てはち
どもそれくくはぐめ川近衛乃左大臣敏へそのお形
柳緑ちちぬ世二ふ乃いはあそちさいや
まちるり器の左どの北条殿ぐちくく仲帝
ト乃ふ院ち仲馬乃ちは大文院仲琴東二条の
院を仲笛なく賜物どもいりものどるべく

西谷殿と云ひ源心院殿関白と云申さ

第九　小野好古

元ぐりん禅門十一月六日議位のぎし記常はとと
し十二月廿八日四郎位を源門ぜんぐわんかぞうへ
ぎうまとしとうへ云ひぬおり丹乃ひんどゝ云ふ人の
二日右上天皇の尊号あり新院ごきこゆ中院と
院ひ〇を日ふりかわりくるを院ひとゝ院あをびゝ云げうん
所りくゝ中くゝいとのくゝやうかめやゝくゝ院ありさま
ふなげくゝむやうなり中文と流号丸のちは
ホ二条院と号四二条殿小路ぞうとゝ世ふあか
きれくゝ入道ひぬ常盤丹して大炊御門
京極とゝ不ぞおりくゝみ院ふおの入名殿のれ

をとこにそのうち右大臣実雅ときこゆる殿あま
くもり行く空中にまぎれさるとぞ思うたえも
のふかげ〜めづらしく今上は御代よいでぬべき
と思ひそうたはいで文應元年入内あるべくおぼし
おきてたり院ことに御覧入道殿の
孫の姫君とぞいりぬるはいとあまたでいつも
やうにおし〜うち沈ふかたけき内のかうでこの
姫君のはせうとあまたあるなかに中にのうまれ
中納言公家ときこえおはしいとめでたく
きこえふりまくるものとも沈ふをいと紙〜かりあるま
ぬるきいとあるほどいきおとる思ひたるかりのかも

たくぐりぬんかりくれ〜さる初秋ふ〜あり此秋なき
ぐらもそいそぎのちりけるけこと紙の宮〜
きふくのくわをすぐ〜沈ふをたぶふ又ぬるさ内ふ
ふをうかう〜おぼ沈初秋ぬ〜紙多りてえん
なりなぐれよおくぐわう行ひくえなまへを姫君
うすあ女部花たぐ〜むさかさひて几帳すこと
くげきくわくまう紙さ内くちはひくちもいふよ
しかくあそふ匂ひみちくぬうくえく行ふ内く
しいとおちくく大主は扇ひうやをむりげきちん
内ひてすこ〜あなるかくうぐえく行へるすぢ
おまやふひたりすくもそぐふすぢかくう

いみじき人々家々におもしろうめでたく人々かうめでお
ぼし次几帳などもありくらべざりけり柏子うちかく
して此箏のことまてまつり給ふおぼしも中納言
まゐり給へるところときこえしもこまうど
比叡の御簾のうちにさぶらひ給ふ宿さぶらふ北この君しもそ
又いとめでたくおくまでしめやかなりのそこゆうし
うちそへ給ひし人づらひせし御やうにてちりまゐやう
よなるめしうたみたるさ御してあそびうつ
なしいとどめでたき川めくさりけ胸と念じ川く
よう舟などくさへ給らり絶えすこし吹かれし給へば
雲井に臣と挟ぶらし給ひ給し御箏の

絵乃ほのかにうつくしげなるかたちあるさせ乃前にゆく
きこえさせあうきせ遊ぶききぬべきを待ちあるくもく
かし給ふなでしこ按察も此かかくきこゆめ給ひたまへば
おうちきこえ給ぐしいとなかりきこえかくふき
かくりきこまへ御かたくいとつめまめやかに光とどまり川と
なおしめ御とめし乃ん御給ふふかりさうしきこんなふに人のおや
はいとは清すましてかかくそうとひかさいたりあらさ御
どもめかしきはなかしうらぬめしめ御給ふところよけきたひと
まふもとつりなるへし十月廿二日まゐり給ふひさ
しきこれもいとめでたし女車十両一の車左大
女房へ二位乃中将もとざねの女 三位の中将きよひらの女 とうのすけし 二は左春日新大納言代

新大納言は我家の大納言乃女にや笑ひしかやう
まつりても下渡してさくしかれどもむつかし信さ
うし青柳(あをやぎ)梅枝(むめがえ)高砂(たかさご)ねさ川といひしこれ貫川(ぬき)と
は門出びく御うんじて姫君一所いくものし給ひ
きうれ姫君は忠忠に近衛(このゑ)関白基家乃北のかく政所(まんどころ)と
なり給ひさきう給川の手よりも女御の后さ備形(きさう)の
めでたくおぼしませば上(うへ)も殊かしはさみかう女従
は十六までなり給ふ御門は十二乃御世しかせはいと
おとなしくもおもすけ給へきばめやさしかどなり
あまとかの下くゆかなんちふにもいとうましさ地から
かたさらく給ひして胸(むね)のくるしき備かまいば出でむ

その川べきんかうし給ひぬそのみにかかりなり給ひんと
いとなうしきわらなく后宮(ききさきぐう)あかりしかどたぐさて
給ゆきそおぼさ給ふ事かぎりなし西園寺(さいおんじ)の女御(かうご)
実さしつぎくまいり給ふとかくさ備かりんと御胸(むね)つぶ
まくおぼせとかしもあはれなるさまにもなすぞなり給ひ
あまた今出川(まいでん)のおとゞ公相の御女(むすめ)なり大宮院の御子なり
し給ふまで笑ましいつまでもちかまぬ御中よいと
みさしろいたまふわざ貴くふく紀事もあるべし
実ばかむのありしむかし給ふありし人はおりし給く
そへあかり中山し給ひかれどいまの世乃人の御ぶとも
をあまりすぐうつふくみやびとうちのとれおゑ

きぬかるべしとおもはれし所よりさきへとのゝ中
えいあつりて空所をとゞめんとすれどいとゞ所いあつる
ものゝくんへ行むとくるをもつくるせ給
りしばゝ学がくをとりゞ南かきこゆるをおりる沢
かりるゆゑ世の人もいもさくるくるくるくるくんや
まくあるせどけつとも和ひと行ぐとたゞ今
きうゝゝ不ゐくあるのごめくまふふるて弘長三
年きゝ紀のよりたくく世ノ々くきもうゝかな
ゝきゝとかゝ春風ゆるく吹く春山霞の内ノ
梅ゆるつむをむかゞ紀はゆゝうもてとれきば
紅葉あるべくあり〳〵をうつ関白二条教良実この三年

ぞうゝ文ゝ角りあるを行へ〳〵ゐ沢ゆをおりて
紅葉よりもはきふまりいつまりけ行ふその沢ゝ
上達部をまいりきゝくゝ紀かぎりあるをたく
かゝ新流も女流をゆるゝ歌行ふ沢ノ汀よ
舟どもうゝべ音をゝゝきさ南かる壹口位のゆゝ紀
かゞのせく紀のゆゝうばけうこ紀いぐたりあど二
かくあり〳〵つ〳〵舞楽さ南くゝ曲おど多をたくされ
音ゝ出あそむのゝう人ノくゝ行きそまつる紀契延年
ゝつ頭なゝゝゝや内ゝノ出せい
きつゝきくあるぬ四ゝ南ゝ出せかは
おゝ紀や紀のゝけよすこさん

かやうにまでもかぎりなくれうまんとぞ
ぞ姫君人々とめつかせおはしまして
ものどもいとさびしくなる中に名んごのはなを
を学ばかりなる梅の枝にはつかに
ら世ばかりなる流のうつる
梅の枝よ伐くばかりむかしの恋かけ
うつろひきみなる学の詠
市姫一位殿もあまりそ光はりうるて
くちはつるまでうれしや宵のうち本院殿山
なるて如法かせばかりいとありがたくたさは
事なんうつる後白河院をかなるいせ物

語ひ給ひてもいとしてあの事なりいと
ふかくなりぬるせばかりいとなるべく
さかあまりたび伝うつるとうとうれ
納言はく一人さかひ行るやとれき顕家乃
摩士どりと名ばりむり上東門院もおこかい
物語ひなりうるあ大宮院おかしくあく
せかうまひとそうけくまつり十種供養して
事後を浄金剛院（市姫殿）れさめさかくまへど
関白大臣上達部あ西さはたくはもつうまつ
らもけるもはりくめつあつるる白ほくかんそのと
一九月十三夜亀山殿つ桂敷敷そ学会せさ物

角まふうやうはなはだいと白河殿ふかくとまり給ひ鳥羽殿をもはじめ
くまなげなりしかどいとけぶかくしてなれがほなりしぬきの角むいんぶくふかくぬぎかけて右は関白殿より
て所どころをうとくなりぬるとかの左大臣殿の法のはかりもて法
流せられたりしかどもなほ御ぐ敷とぞ聞こえしとかの左大臣殿の法のはかりもて法
新院の御位のそむきめ給ひ又一条殿と
又さの二ところをだにうゆくもなほ御ぐ敷とぞ聞こえしとかの左大臣殿の法のはかりもて法
かくしたてまつりたてまつりたるそのかたぐれなりけるとかの右は実
白殿今の御門の御ぐ敷とぞ聞こえしとかの左大臣殿の法のはかりもて法
ちもうれたのみちのり上ひとりの左大臣殿のはかりかたて
をくはくとて風流の別流のはくれるうへ

よ銀の舟二ようくはくれたるをつまれ
ちうれも沈くはくて舟よりはたの渡所一
度よ御所ようまいりの命よりあぐ左具氏中将右行
家ゐり山紅葉本流の御製
かちらは世間もいかうあさしも
秋うへくらんか山おろかみちの京
はかりよ左御勝の教まきうとぬ板縫たてく和ちを
行わどはあうびうじ海の俗記山流中納言長雅茂
通の中将笙二明の中わそはせしやひちを
きぐすけの中ね琵琶おれきわぐ二相具氏の
中将もおさきをれそ御簾のうちにも御箏も

うたおもしろき所々の本のなかくしなえしは新院の
若宮の御母君にや刑部卿の君もむかれたり楽はひ
さしむきまふねたまへしかば土御門大納言通成など朗詠
しなどふさはしくすけきんなどこゑぐゝあはれなどお
もしろし川浪もあけぼのにくまなくすみわたる月は氷
とぢたるかとみえておもしろきに山のかすみわたる錦
とはまさにいひつべし吹嵐も松風もききなしては
所のさまも御みまへなりけるにやただ所々かはり
おもひいでぬべきふしぶしはことつきがたけれど
ありへては男もむかし思ひやられてなるさ
まにとのこと御かうけたまはりもあまりにたひらぎる
めでたくもおもしろかりきかし同じ年にや前の
内大臣基家為家の大納言入道侍従二位行家
光俊の弁入道なれどうけたまはりて撰ばれさせたまふ
けるさきにふみす日ごろまゐるべしときこゆかねり
かうのめでたかりし元久のためしをこそ一院もかく
思ひがせ給へとてこのふむかりけむかるむどもありけり北
給ひし年月までもおなじくかはさまよりつらか
くれぐれはへつくめさし世のためありさまのいろ
きうふかの集は序までしまゝいかまし紀世也
春風に添へてあふぐと称するも和歌はうつくしもまた
たうくふかり秋の月にみえてあきらかなりやかな

あるはかなきまへるかやうにて金葉集なり
ではいかなるのあるこれをもいとしるもい
るあるべきの中務の大の御かのうぢかれはべり
かいとやむごとなくしるし新古今はかはあるうぶ
や寛喜こいふ年おこるはかはあるきき
式集とは續古今とかあるとの年文永とあるべきよい
ちるぬ年出来く中務のはからやうのべせさ
まふるふとなくあるこしはるかはいう法
ふいなる式時頼朝臣るまばまいの御ちつき年
あるはなるれば文をはかの惟康の親王す将軍と
御ちつ為文永三年七月八日はかはかはひめ内下

とのべり六はしふかちく作りし檜皮屋ひつを
うこふぬそうめはうはかはいしかやふ
川ふかちの御ありさはとはしはるひよは
うくしうとのふ法ぼうあるはれるるや
庇とのうちあるはれはしかめて
はるはうの嵐のあるはうよの中
流あもあづまの笑とはかをせはむく屋ぞは
中納言とかくいとんくれしもきあえさ歩
毎ましうの御行の大納言いまぐ下簡なるし夜
少つひふぐうれくあるふのふとはるれるし
事はちぞくるしうぬふなりて文も広つ反

兼明門流の山あらくいとせばひとすぢ流れたるよ
ゆまつりのごあらくくとはるるまつる所あ
うびなどもしるしあふ言のいとうゆりなる勢明
て本座の馬場ひろくはらんでまわりてはん
のうちも

あれ野のむ小野の雪の朋わりを
流れ来ぬこしに宇門をたれ勇と

世とうぐむなぐ思ひまうるとなる姫のの
学れ山弁すぐれとゆせ行ふよ柳くいもむ
川まうを流うまつりをわぐをの川う
なるぐ四月ものるどわ月くをりてまを学を

きあるやうくいひかけるうあやうあ
もひぐたりかくわうまあどあげ
流ふうふて日ごるぐ夜りてすこし晴るえ
ゆるぐううれ学りやうわうを二条富小路
上本流新流むつようをせ流ふあるくく
かくぬわとのけあうびあり大文流東二条流山几帳
いわ角ぐてく行くしゆを山ぬるわきわぐ云相常
磐井入道実氏卿のおぐ実雄久我大納言雅忠など
むつまし流りさふひ流むく流みきいるあ
まうぐるるあぐれくと上下をこーうるれ流へるよ
おわされぬぐ本流の山さうげる行りうもりるかぐう

ばかり侍るとぞ聞き侍りしかば、中
院の右大臣殿、雲子（うんし）滑（なめ）なる事なれば、
内侍のかみ、実房の宰相、
なりなんとて、
四位ばかりにて、
はるかに思ひたりしかば、
ぞ侍りける。中院の
入道相国、
うらやましがりて、
あつかりけり。

とぞ侍りける。むかしは、
とぞ侍りける。
うちわたれば、
入道殿、
うらやましがりて、
安居院の冷泉大政大臣殿、
沙汰の中にぞ、
まうでられける。
殿ばらの、
誰もいとなみ侍りける。

きあまをばかりぐとおもひ山くちくよの祈
きうくくはくしはあるくこぶぎに又うちりし
てはかりはとかせんとおもかくもやすれかも
はるくまいぢおもひ〜はぐふ事かぐらとかほどちく
なりと法もねりて本門教義明門流のはあとへうりの
ゐ法ふ世中ゐぐれくて天下乃人名うれたぐれ彩も
刑あるわどのを法りあるとゐ物ゐ川よ度雲
うちの人くいまして人をもちうるぐあるくし
れくかぐりなれ彩どもとて賀茂乃社あるもれ
調度どもの中にたぐれくゐ寶とおぐさゐ法
手鉢〜所乃天為つくかせ法へる彩文入て神度

まあめくまありとうまてよはたちひ四十年までいかく
くもをふ一人とうや法りちるとぐうけくとはうち
法くふや法りたんふくいまを文永四年十二月一日か
ぐまいの四相のけどもあくくれくさけむくむ為
いくおそう〜はまどもゐいのりれ為〜あえも
ゆくぐめくくれむのおのこゐふ殺むまれまひぬ
うれわどの為くいくぐはもをけうゐぐうへも
くぐうるれ四んくまくいくれぐを為ち
うまく〜きあ〜め沢れくぐもいまぐゐ胸あれく
ふおち井法ひ分新渡の為文代流おの度の四祈
ぐくうまは東二条渡乃四の中をはれ大

くさを又うけるとやむごとなかるべきはあるべし
げきこしめしけつるあなたのいとまとは本
院も大文院もきいたふるもてきやしかづきをて
まつるせ行ふあまも中文乃ひをあいたしあるぬ
まはあるべしどいりでぐちはのことはあるんと西園寺
きんまで一くさあるべしぶ行ぶしむをぼれをゆう
ぜをまいあれ

文政十丁亥秋　鶴長月ゆるの秋うつして　中村真芝

第十　あすか川

むすび拾く駒のあしふまを疲くて文永を五年うか
るぬ正月廿日本院はれたるまに留山行幸して
今上はわう文法いりきこしめしうきよう成
ぶくさ形へしいしい正月より国あり後乃廿日あまを
はわどふ冷泉院まて舞はらむあり所ろんと
一院いそぢく月てせ行山べ九れば内裏あるあるとく
いそより世ちいそぶまきこ拝樂おこしめし儀式い
内裏まてあるとあるを試樂廿三日ときこえしを
面ありくあく新日体あるく人くまつりけふ
新院い後深草かのくまつりまくるる後行へ寝殿の

御階の西に一院のおはしまし所まうけられたり。に
よりて新院の御座、東に大宮院東二條院おなじく白
き御よそひにて二所ぞおはしましける。聖護院の法親王
圓満院などもまいり給ふ。土御門の中務の宮も 宗尊
まいり給ふ。上達部殿上人あまるくまなくさふらひ給へり。
仁和寺御室梶井の法親王などもさるべく御かたがた
にさぶらひ給ふ。月花門院花山院准后などは大宮院の御
かたにおはします。御座に御几帳どものけぢめことなり。
給ふ。寝殿の母屋の間に袖口どもいとことにてあり。
いとさかの大納言の二位殿もおはしまいらせんとて
あまた上臈も院の御らしの御簾の中に候

はべらしくさぶらひ給ふ。いつもより御前に二人ね
あり。東の方の一の間に大宮院月花門院の女房ども
まいりて給ふ。御前の方に新准后まいり給ふ。御階
のもとに関白をはじめ左右大臣内大臣 兵部卿 隆親
二條大納言 良教 源大納言 通成 花山院大納言 師継 右大将
通雅 権大納言 基具 一条中納言 公藤 花山院中納言 長雅
左衛門督 通頼 中宮権大夫 隆顕 大炊御門中納言 信嗣 前源
宰相 有資 衣笠宰相中将 経平 右大弁宰相 経俊 新宰
相中将 具氏 別当 公孝 堀川三位中将 具守 冨小路三位中
将 公雅 これ階のもとにすゝみてゐる。すこし下りて二の
間より又右大臣 実雄 二条大納言 経輔 前源大納言

雅家中宮大夫　雅忠　前大納言為氏皇后宮大夫　定実三
条大納言隆行　帥中納言経任などの侍られし上達部かし
ひかしの中門の廊うちよりさふらふ透渡殿のうち
ちかきまで法師あまり西対まで多くゐたるめり
かさね色まへつきみたち殿上人ともまいる実冬の
中将かうさくら柳のにほひのかさねむらさきのこき
うすにほひにて梅とかきたるあかきのかりぎぬされうかな
紅のにほひむらさきのこさねかうしをへぎされうすいろの
かしこき人よりもすこしたちまさりしにあかいろも
げにみえて大炊御門中将冬忠けしきはひしらしや
紫末ほそきのふたゑのにしきもにほひかきつばた

花山院中将家長　内大将の御子亀綾の山吹のかさね
柳さくらにあはせてうち紅のうちきぬおなし色の
いつゝかさねにて萌木のうへのきぬ紅のあこめ
のむらさきへうなれたる狩衣もえぎのさしぬきさくら
かさねいかのまへてあゆみをかへてかたくいろ山
いかにおほせたまはで師継の子なりし桜のしもえびのきぬ
ぬ白きいをとものにとにつけてむすびかさねうへり
梅柳をとりまぜて世をひとつにかさねしうえび
なりあはせたるさきの表着のこきあやのもんをおくとの二
こねおなじひとへむらさきのかさねもやう
ざれくうとおなじもへにふてたてまつる中宮

権亮の将監重実為の大納言殿のもとにて物の始
とえらばれたりしぎぬ紅のすりかさねたるに
きぬ紅のむらもんぎぬきまいの世にはさぶらはくと
おもくぬいつけ 堀川の殿の御
山ぶきをかさねたる柳さくらをかさねたる
よきうへをえらばれたるのうちにぬ柳
紙さしはけのしきりにうちぐしてかきて交り
てかくれむとはしたりしぎぬ紅のこう
さしぬきにおれをさくちらしたる二条中将俊良敬
の大納言の四条のおとゝのもとにて物のはしらせも
えらばれたる夜はるぐしひとへかさね白石文権亮中

将実守これもはるぐしをえらばれたるぎぬ
いのこかさねひとへ 馬頭 隆親朝臣
やうくこいのあいつはりきぬむらさきを入あと
き奥後のうちぎぬにうちぐしの二重ひとへ
うすえのはしぬきかさね将実絶はりきぬのかさねの
うちきぬもしきぬの二きぬまをとくはぬいもの
をきぬいもかなりまめうちをかしうす陵
王の童の四条大納言殿の懐米はのまくれむ
うきぬのはしくきいのうちんえりかのれもん市地のかり
きの指貫あをきの奥後のきうちをしやくきのみかえを
かのぬのうちふりてもちうるうい家いさいく

しくとて同者てめくたくみくはたりふえ
たりやを笙さんあ紀宗実むちつるき亀約太鼓
義教かりこあるくのとこのりらとたあ栄
楽右地久淡路海波太平楽入綾実名いく
しく舞すまくれたりと水薗潟左春寓時右古馬
蘿後桑賀敏の入あやを実名く舞はひしりやく
れしくはかとあふはあやをもみえ次なりとはたく
くあくらあれはもねあ〜二月十七日に又新
流留山殿敏して舞はくひそのあ大流まり
そのあくくらくらあ殿たまふ一流の出舞はあけて
なあ冷泉敏をりたくくひくれわくあもい楽人

舞人ふの紫宋して上達部あどくれあのくはぐく
庭右出車にくはは月十二人花とかりりきと載
くくあくくあ沖前ものやふあいのくとそち
くくあふくひはるぶくはあり〜新流はあが
う〜垂衣はりあきはくて中門まくまりきて
くあ殿はつるはぐいくえんあめく参〜出車中門
小とくくあ実日敏はくりくあ沖西笛敏よつく
屋殿小二年をりありくくきはは几帳のかくびくと
いくきくくあくくは平敏のくくぬくも扇の具いなく
てくいくきあくくあ正釈町流も沖堂の角はるく
とはら殿殿りあ大臣上車敏あくくふりくびかとま

いりくる人々をおほかれど、それぞれかし実々
家の六位田うち山吹のかさね二まうちまへさき
うしおとこひくあつくよさほはらかりく
くさまくはてなかりしおねかえびと
さつりえさ九五重のかさね紅のあかひの太ちねう
ちさねを召りつゝ山吹のあかひうきをとり抱れ三重
むへむしさかのあやゆらしぬき中よりこぼれかけり
らふみえぬつりこれるびをむかく流くふいのさねと
きこゆ万歳楽とあまきて楽人舞人まいあそびさい
まゆ仟とをつ春鶯囀古鳥蘇後参輪臺青海波落蹲
なとあり日くらしおりし流くれてしつらそ帰ら

班御ふかざふ赤地の錦の袋よりひき入てまつてまゐり
らせ給ふ刑部卿の君は内よりいで給左大将なりて
院の御まへよきしきことゝもにて胡飲酒の舞をまう仕
の中将しうゐくいはりし給ふてたちよるいく内
つかふしかど近衛藤関白殿の御子三位中将きこえ
ふいまだ童にて舞をまふ別してこれ試楽より
さきおりしきや内く白川殿まで人々あまたま文の
殿上出雲のうちまて見給ふ若君いとうつくしう舞
しまへど院めでさせ給ひて舞の師よくをしへたる
おりすぐし家なりやうきこゆかなどふむくなり
の軍といふ者たりて御かぶり給はりぬ人々く

くらゐのくんかのこと
行ゆきもうちはまし〜たるやうにて出家法やかのや
と公家武家をぐまのはをれかりうれども祖をく
ちがまりていとめでたく〜ふくて今上はあるえ六月
十六日親王宣旨あるとくおのづからさ八月廿日坊房法
ひねくるやうれかるよなくも入道あいめざましく
おのづからおたくのうさらぶらおしてなげきふかい
ふくはるものの〜ほとんどふかい世のかりはとかり
こうふくまりぬくおのづからおぐさしも中文を御服の後
も海のうりおくをよ物がりへ物うりもりげる世の
なりあり一流をはあるかをとうげん事と思うくおぼ

もそなる年の九月十三歌白川殿にて月ひろんをるか
小上達部殿上人例のおのくまりぼる御所合
あるうらば内侍女房どもめされく多くれむき物源
氏五十四帖のこと海〜の風流ありて上達部殿上人
までもうちをまりて後清製
我のこや新をうらむめすう川
おのり〜剣淵をは月をもむこも
ふくより神を時白て是深の
ゆふへいろまた岩北紫
ふのは平ふてそ出ず井のもおぐ〜はぐめりもを
うれ人神をあるりてふをかくてとうあるれ

こそ民部の入道乃家判ぜさせられ給ふも為と
せんとてとぞ記しとどめ侍りける
しらりふくて神世月乃六月廿日山岳へ出発なる
ゆとりの中そびえるまばゆくふかく侍へさ歩
浄土新流まいりおそ大文字二条ひとつ法
車まてあるべくとらるる世法大文字流いろ〳〵菊乃
四ぞ京二条流をあとをもらぐ乃八ぎくれたうちきた
てまつるまげ小野平賀の社へまいりあまぐ法源
為どを記とたりはくしゆふとかぎりて高あり
よぐ内うを記あへる南社りて馬あげをれあ
つるれいふ名あるあるくるるひんをへうりを
ぐれく来乃塚さそふあるこをたりをりがよ物悲
うりをあるそふいりしあまふ人〳〵おそる色
し中将の御子々ふたりたりをりをきたる
まふ〳〵中将

祇園の次宮ふをいりをたりをふを
しくれをつるを神かりの郎

屋ぞうれ歌四ぐ〳〵おりを出戒の師まい書逢流を
法親王まいりをふそのこ法やうて御遊伽ばりを在
祇へどその行女流いりくの四持物どもたそまり
つるふいまはりく法の道をのをりてなを行へ
りあ歌詩を山観乃演義ある時を真言乃者を

さて浄土の宗旨をば法ひつ〻ゑ法づよ
かるひとびとかゝる相〻ゑ多くの年をさ記の世よ
ゆゑ〻こゝに於て法〻師匠なくいと
おくすゑを常ふかきあり〻ぞ記あり〻さ侍
りゐくてゐ〻をくれぬ人〻〻やまひの法い
きをの月記門流小りゐたるまき世法ひぬ法皇を女
房をうぎりゐく思ひきこゝさ坂法ひ法ふいをあさ
まいかるを侍ゐ〻ん又人をぐ〻まやいゐく
きこゆ小年ぐをぞいとゐ記たりき小辻の房仁乃
中将之のぐくまり法ひぎゐとかくあきの中将ゐ
のぢまゐをして又まつりくゐつゐけるゐぐふあさ

まい記小年さ〻あゐてゐるまゆゐくれを法ゐつゐるゐぐ
ぐゐくゐ人を法りをゐるとゐまでいあゐじゐを思
ひ法〻まぐいゐくあゐゐん法皇い又文永七年神无月
のゐゐ小ぐづゐ法ゐ記法記一部供養せさ
ぬ法ふ市八講ゐくゐ法記法記一部供養せさ
とあゐゐ世中乃人〻法ゐくあゐ法ゐ記ぐ
かゐくゐゐゐ法ゐ法ゐ記ゐ新流
なゐく法をくも小ぐ小年ゐはゐかゐ
ゐゐ侍ゐて法の法ゐ記ゐ法ゐ
かゐで小ゐゐ法ゐ法ゐ法ゐ
法ゐ法ゐ一ゐゐゐ法ゐ法皇ゐ

うりうりうるくしけかくしとかくれうり米二
日は初よりくの約束もなる立花堂の男はけらげ相
ごしまつりつくふさあつくまつびはくくかくく
四のはくくげ相をみやうにくをたくんく柳苔
をへくく頭巾ぞ持くるる沢よ新流如流をうえくく
ゆかくくうれうるくさあの元日後ニ入るどりてつぐ
きくをと関白大臣などは庵ゆけさ祈ふ大中納言参
議四位五位などは男づくれけらげ相をとりて
けうをのくくもゆかくくよいどくつくしてけらく
初くき申よ無戸口隆親を糸鞋をとりて場ゆはえ
をとりくていどくりさひ杖を屠ぐてけらげ相をな

くりうりうるくをとりてくるくうりうりてさ沢を金をり
法勝寺の日い祭楽かくいくをりくくつくてを沢ぬ
文のをくくに月よをのぐをくく新流く出方をうけ相
沢ふはぐめを法貴院貢をもば出猪むをひよ上を新
うれ五節のまねをくて来をくくうぬあり書をく
おりひの川よ舟のよれくくとをくてまつる新流
引はくうぐくくうりう沢ふ出みきいくくりとるくき
きくめを一法をひげくくの出川出相伊勢物語のくと
ぐ学えくく孫乃地獄よをくくの伏鉄よ美相く
ゆくくて山い不盡の孫いつとるくくと文銀の舟り
けくくの色うをて蓑をくを沢れをこはくくをていざ

車どもみやこなるなどもかくいとなまめかしく
おもしろきことかぎりなくわさともとりおりたるには
あるざりきもと神ぞくには釈院北法務人のまゐもとし
てらんなるいくひとのなる時の月ごとに法華をなんや
やして法皇の御遊ましいなる上達部れをとなひ給へ
なるとはさこうしきく奉りしにやみえなんとぞし
さるはなるおもひぞ源氏の物かたりにもやありけむ
むかしのなる筆とて金剛樹のむぐ入て大栄の枝に
待てり又西院より内ぐわかう梅の花ちるをたつらね
枝に待ちすぐられをいかにやりなる事もさし
みなんありけるに男女房みなうちよりてにぎはひて

御箏どもめし拍子とりなどしてあけぬるを
うちとけたる人々もしるしく殊に給ふ様々なること
しの秋に晩の東二條院日法会ども行はせまさく
つらなるそのれいしきありて世の中ゆるぐ院の内にて
せさせ給へどいよいよ参りはじめ大法秘法のこれ
なくおこなはるる七佛薬師五壇の御修法普賢延
命金剛童子如法愛染などさまざまに数さへ御験者
には常住院僧正まゐり給ふ六月廿日よりの事なり
まぞまだかしこみえさせ給へども二日三日ばかりおはしまして
あるかぎり物おぼゆる人もなし いとくるしう
し給へし仁和寺の御室は御法も深く大阿闍梨に

てきあつひ給ふと内裏よりく入あてまつせ給ひ
事いとよりうえく作りはいなるべきふうく流も
うむ行りまてあつうむ空く流ふ面をうる
うのであれと見てまつ流ひくりうこも宮
しうはあり一面さで空定業乃亦結ぶ業薩流
ちひなりいとさく高清ゑ面を流
く今でたまふ験者乃僧正を一ちひ引て会
珠をすりたるあく宮ふなりしきあ四海
行乃面どもをひいく女房乃きねるちう面紀
まをいるをば寺行りて敵上人小面乃上下の
れくよりちはうち乃上達部い清水

間乃たゝ者よ着て皇子誕生を待宮紀乃陰陽師
巫女をもあつて千度乃ひうこ清水乃神清身
小面乃下箱をば神馬をうり引ゆる流ゑ行ひ
て世一行をたくまつく上下内外の
行をみちうる山宮紀をりうまうせ
をまへをいと一しんつまひてげく時面りる
神のうへをいと行りて流も乃紀をうれく
行ゑれく山宮紀行ゑ北は石清水のうをと会
ぐ行ひつく山宮をうく行ふ面ふかぐ
ほの人れん心つようばいうき軒をたて波行
ゑ行りまや七仏乃河面梨まつりてうむしや

くりんぎくうちあげくはかうじて生れ法
ゐぬるをいふ男も女も姫ぬなりりといを
くらわしくれく家下なる紀人とうて法へるをい
うあよわうすはとよるつしびまいぐはせんく
わがくなぐさむ人くの裸おぐ法のつぐ法
ぐをゆりくいうりくあんぐるさ米まおぐ
くいくくもてうやしたくまつうせ法ふいぐや
くくうわくく男人るく人くおりかるかりも
実雄のたぐれ法宿世あうれあかるつくい
ゐわうけ法ふを世のあるかるむあもばうるあ
六歳七歳おぐくふ菊やうる年をもまてを

てはくうはあうはひう法貴付くはかやみあう
世の大事あまをば法法ぐもゆうあくはぐまを
おふれくはうれあひれぐをこうを法ぐ年
をくるぬむ月のうぐめを法のうくあうて
いくくわ男むるげくあ人五十七日新山度八十年
なるこまやうぐうとくを上下ゆぼくく法をを禁也
女流いまいれ日ゆの男まをまつふうをうう
悪度さおくゑ法道をまるぐさ出せんじわ
と能成師成くふ業姫ぐもあまて志くくを
うつくの水瓶まを入くたうくの中納言をてま
法をくくわ面の信友くふくを多りけるを

内野のほどにてまいりあふのうふ
病おびただしくいとまつりあるるさなりけれども大
事はなとあるくるもうてうちこがすやういはるでら
あるむ法皇をいとぐはあるく病をむくつがそくわば
されり新流を大井川の方よりはしりこまれ
く男女房上下しおくいまの祇いふくと笑さ
物語ふ御つるむの約るへるほどなるといぶるせ法ふ
にむ月もうぬいるを面よりおるとまるすべきあるとく雜
をくおるるまぐふ事ぐうるるかのてようう
やうはをあくおるばをきてあれ壽量院へ二月七
日ようの法ふおるほはるつけの人いまいるば南

松流の僧正浄金剛院の長老覚道上人なとのこはあ
まて法の道おるくでいのくまふ事もかく六波羅小
南院ふるむよ面いまると西園寺大納言実兼まいの
参る法十一日約事あり中一日ようせ法へた
なるくるよるのをと笑をを殺法新流尝
四天ぬんあり法門はは年上いと記やふかるおく
御堂おるもむるはるるる小事をせてのあり
くめくくくおるるまます世代はるめを法りん
ようこう術めるるるはあるはせを笑法をはいと
自分十七日の新ようはるるかるるて善智
識めるけいく僧正法生流の聖おるぐまるて

おくしき事ども空くもうしたりし
七日のうちの内くに出年五十三にてかくれさせ給ひぬ
後法成院とぞ申すめる御しるし文永九年のり院
の中くれのぞうくに御ふ御ものうちに十八
日小藥草院とぞ申すめる御ものうちに仁和寺に宮
圓滿院聖護院菩提院青蓮院うれたもぼうまの門
らせ給ふ内ぞう頭中將法ぼうもまつる此年ぐ程
世をさくめさせ給ひつるあやまりなく
おぼしまふく新院門表えうぐ記なく文ぞう
さぬるうるべき事もなけれどおぼしとくづき
ひとふしとかくに方記はあるまで人のうびくはう

うまれもあるべきしかるべきあるべき程なるも
此三日御初七日小大文院におはくしおはそその程いとし
をかしき事おぼうり天乃下をるべくくうこと
ぞうぬまうげしめやかにあるうれるる世乃常記
ひあるるひるるさもなみぐるまるるいなし院内者
此かげさぶるまして御ものむつまく法ぞうまりも
しくうのおりもしづくあるぶ海にくりうる家
まぶうぞうを法中に絶仕中納言を人まうにぞる
此おぐえあるうさ年もうるるるるるるるかく法
おちしあんくれ人おりくうれる加和
ぐねもて出胃乃出つぐかちまつせくまいるる

思ひのかうりはせんとて人思へつと侍中納言雅
きこゆるは皇后宮の四せうとうとのたうとうの所院
いみじく所うの多くせ殿ひとく夜晝四ろくりさ
うぞくのもしくのうれたうまつり歩行ひ
とうぶとあるかたかはをとうかしこる事をとうに
ほぶ所のうとなくうれ
対のまへうに梅のはなさかりに思ひ入るまへつとかの
の宰相中將うち中納言清慎きこゆ
梅のうれ春はなるうたあるに世に
いかとうとうとうの所うかうん
うた

あるかはうはうたうに世思むめに
おりうまもいふかうの
秋うに対のうかに事も関うんといふうとに思中
はも院の四ひの人をうるうき事とか
成ようのうれたいあうもうきうの所うに
うあいせんと日うくうに結ひうの所井うに
あやしく折ひうやうに秋ひうしてうの
ようひうにうとふいとに皇后宮の四せうと春宮
の四ひうるまに世ひうえとうるてもあうに思
ひうしうにうりうるべきうとかくうて
うかるべいくうあうれもばうか人ひに

[illegible]
納言はるとしの卿心ざしあるやうなれども法の中道
をつたへさせおはしまさんとて[illegible]
おはせし公家の中納言もひとりおはしまつる
つるやうなるべきなりとおぼしめしの中納言さんかくも
の[illegible]ひめをとこ[illegible]
[illegible]
ばそれをすてはぬどふ[illegible]
ふ[illegible]代をもえまちいづまじ[illegible]
きもうしおぼしめしつけて
[illegible]

なのこをおうの
歌[illegible]
[illegible]
をいむつもこまりぬ月日のもしば枝流の世数もか
どのうすぎにひぬ世中を新流おくてあらしませ
ど法皇の門うつしてひぞあらむと世人
もおりむ[illegible]代の門[illegible]
[illegible]
[illegible]講堂[illegible]
[illegible]
いつまでもなりふる新流六宗教よわるる後
[illegible]法祇園の神輿[illegible]

面の取りと故流へきつてかきれるしかるへき由事なれとも
とりされるひつ服のほこりふてもはしり面も
かるくふとりうるべき世とおりひろのまきて
ふ人くもはる面へいとや伝をたる面に
はきてきしあうの沖まつとごおとはおとりも
新流も義文おもしまもせば行を清乃一ふ一はか
どはなどいひ一ふ家れで以つ流方内方と
人乃つくも引ふ新やうちつをうもいて
はなり人ひとりたるはしり面きあくはいうきわ
まるありけ白羽れはまりとて田村の侍軍より
はきりまいつをおとはもしの紙をはは
ちりおりしり面しけるもやはくれのちをて内裏
へきてまつりせはひうまるとは紙を女流乃
うをめしき由事ふは流を異ひきをんを多はひ
なるはきしもやいるもとをおのしをを関のひりへを
のきまひはりしきは内は花山流の大きれとを
後流乃別当よなきれく世中為りうきてくめさ
世はふををよういく義やふいまりし記不れたる
君ををようけかくしうん空原をくれさ多
たまひしのりを問きをあはるけきはめをうて
きあを紀はりまくわりいをを中ををを

とげくもやるべかりぼさんれう板流のはたらて京遍
させ給へと世中矣あるたまりて花やうふ人ら
の御なげきは矣もうすまじきはくしもあるか
なくしひるうらうは矣表矣例ようもあるうあさ
で見はなをば内はうへはもしはまて西波はや
あるやうはいと疲給ふ和氣丹波乃藥師とも氏成も
はなかるはるさふくひくはいと御業の事矣くはうは
まいをどたくあるくさあるふのくれたはいるあるべき
はは事ふるをいとあさ御うて上はいとこれはるくに
ちくせ給ひくふるくまつくせ給ふ肖はは事ねは
かくはるは矣あるどもはのりふ業ふみくあれも

いくあるくうて御虎ふをめくよをくはらんせ
うふ殿をひくくして居をるくはいうふく
出をる英波の矣あるりいはあさまくおどかるの
事をはうあくはんとくはは紀あくれを
業御どもいくうはこまり色をうあるふるり
よあるりくは出矣あるくていまるくくは紀はいでく
屋くくをのくれどもはくさはをくいまる例の紀事
はいくあるべくさくはるは伝をていくるくは一た
びくめくあるとうは春宮をはいまるくさは例あるり
名れどんくくは世んとくはくはくむ七あるくせ給
つをはくくでをふはくくさはるはどあるふまあふ

いみしくなげき悲しみ夫婦ともに夫人ひとりめし
入れて又人もまいらせず門の御前にて面ぞせさ
せたまふ乳母ぞもいとあはれを
思ひきこえいぶかしうおぼしあるべきに
いぶかしうおぼしゆるさせたまふ
さてやがてひとへに上れば御車をとどめ
させたまふ御門のあたりかくぐしける
さまにかきなれ御んよりあるべし
今宵ばかりはこのうちにやはとたのむ
きぼめぞきこえ侍りなれ井ひぬ大きこと
たげくもり世中いとぐしくて
なげきれく十月十五日より圓滿院の二品親王御ふ

さうぞくひきく尊星王の法修法はじめ行ふ廿日
ばかりより二乃剱ちう大いぞ起りあるべしいと
むくつけく上下ものいとなきに思ひやる
御一大文流も内くに行ちて御一宮ぞ法ちてい
うざ出さぬ法法東北棟木もぞ大きえ分
けるとて入ちてよせて表文をまつりそれ
ぞれ白衣の内侍星へいぐちりけもはぬりごあ
りつれをきこえあうるひくいとこと大事かり
けるとうきこしめしてあるかふまを法ひとう
なれどいぐりつもれたりまつぞあるけるう
そおそ御ぞ法ひくはいとおきたる事ぞあ

たうりきが家流の門をぬけて入るに小唐櫃かよ
くれの御寮もまへにかくうづくまれねそれぶふ
とあまりにもそぼくにはかりん御うぶぎぬなどの入
角ものを横よりの上八腰輿にて押小路へ行幸
なりぬ法親王の御法のつきぬへきにあらずやいか
かりとぞのたまはせける由の宮よりの御ゆ
るしなくかくかくかくかくいくばくかくふいくばくさるぐ
なれどもいとゝ上源流侍所かたに有けり
角てまもなく出わたるやうにて大きなる
屋けたにこもあまたばかれたる大事も
あるべうきかくかくかくいくばくはちんぞく

事ふとくもとれぬ上をいとくく世の中にあるとく
しうおぼえぬくおりまれかんの山のづひすめを
くくみよりまりまりては十八年ばりまやる家
ぬるむいまぐ二十あまをあるうちぬれどの御
ようひるまばいまぐはりうさぬれの御
御ぐれ先に

文政十年九月六日

中村直道